

1 次の問いに答えなさい。

1 次の(1)～(3)の文中の傍線を付けた漢字の読み方を書きなさい。また、(4)～(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字になおし、解答欄の枠内に書きなさい。ただし、漢字は楷書で、大きくていねいに書くこと。

- (1) 花の芳香が部屋に漂う。
- (2) 腰を据えて物事に取り組む。
- (3) 鳥が羽を繕う。
- (4) 計画をタグチに実行する。
- (5) ビアノをエンソウする。
- (6) 恩師へのシヤジを述べる。

2 「人の短を道ふこと無かれ、己の長を説くこと無かれ。」の読み方になるように、次の文に返り点を付けなさい。

無道<sup>むどう</sup>人短<sup>ひとみじ</sup>、無説<sup>むせつ</sup>己之長<sup>おのちのなが</sup>。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

短歌というものは、五七五七七の三十一音からなる器である。それ以上でもそれ以下でもない。したがって、短歌で自分の感情を表現するとき、その器に盛り込むことのできる感情の量はほぼ定量である。感情の量が大きすぎると歌いたいことは短歌の器からはみ出てしまう。また逆に、感情の量があまりに少ないと、短歌の器は満たされることなくスカスカになってしまう。

歌作りに慣れるということは、とりもなおさず [ ① ] ということなのだろう。器に盛り込むことのできない大量の感情は、最初から短歌にはしない。反対に、あまりに少量の感情しかない場合、それを歌にしつらえない。成熟した歌人は、そのようにして歌の器にふさわしい感情の量を見極めてゆく。その器に、ぴったりと合う感動を与えてくれる題材だけを歌の材料としてゆくのである。

が、斎藤茂吉という人は面白い人で、成熟した歌人なら初めから歌に盛り込もうとしない大量の感情を歌に盛り込もうとする。ただ、その場合、彼は普通の歌人と違って、三十一音という器に感情をぎゅうぎゅうづめにしようとは

1 次のうち、本文中の [ ① ] に入れるのに最も適していることばはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 短歌という器の大きさを知る
- イ 端的に自分の感情を表現する
- ウ 感情の量を調整して盛り込む
- エ 感情を歌の器に盛り込まない

2 そうやって作られたのがこの歌である。とあるが、本文中の [ ② ] で示した歌がどのようにして作られたかについて、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。 [ a ]、 [ b ] に入れるのに最も適しているひょうじきのことばを、それぞれ本文中から抜き出しなさい。ただし、 [ a ] は八字、 [ b ] は十七字で抜き出し、それぞれ初めの五字を書きなさい。

橋のたもとに立てられた立札の [ a ] に心を打たれた茂吉は、そのことばを [ b ] ことばせず、七句四十一音の新たな定型を作りだした。

3 融通無碍とあるが、次のうち、このことばの本文中での意味として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 後先を考えないで猛然と突き進むこと。
- イ 思考や行動が何にもとられず自由なこと。
- ウ 他に心を動かされず一つのこと集中すること。
- エ 長年受け継がれてきた伝統やしきたりを守ること。

4 本文中の [ ④ ] で示した歌について、筆者が述べている内容を次のようにまとめた。 [ ] に入る内容を、本文中のことばを使って三十五字以上四十五字以内で書きなさい。

「人ならば五人づつ」という五音一句が [ ] ところに、私たちがこの歌に強烈な短歌らしさを感じてしまう秘密がある。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

同じ人の説の、このことかしこゆきちがひて、ひとしから成るは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の説、すべて浮きたる

しない。自分の感情が入らないと悟ったら、さっさと五句三十一音という器を捨てて、新しい大きな器を自分で作ってしまうのである。

釣橋のまへの立札人ならば五人づつ馬ならば一頭づつといましてあり [ ④ ] 『たかはら』(昭五)

昭和五年夏、四十八歳の茂吉は、十五歳になった長男茂太をとまなつて出羽三山に登った。月山と湯殿山に登った二人は、七月二十三日出羽山に登るべく赤川の支流の梵字川を渡る。その川の川下にはささやかな吊り橋がかつていた。橋のたもとに「人ならば五人づつ、馬ならば一頭づつ」という注意書きの書かれた立札が立っている。重量三百キロを越えるようなものは渡れない危うい小橋なのだろう。

茂吉は、その野趣あふれる文字に感動する。その溢れる感情を短歌の器に盛り込もうとする。が、その感情の量に比して歌の器は小さい。普通の歌人なら、この立札の文句を泣く泣く短くして三十一音に入れ込むことを考えるだろう。たとえば「人ならば五人づつ」を切って、「釣橋のまへの立札馬ならば一頭づつ」といましてあり」というように。が、茂吉はそうはしない。断固しない。自分の感情が、器に入らないと感じるやいなや、瞬間的により大きな新しい器を作り、それと取り替えてしまう。そうやって作られたのがこの歌である。

この歌は、普通の短歌定型の第二句と第三句の間に、新たに「人ならば・五人づつ」(五五)という五音一句が強引に差し込まれている。「釣橋のまへの立札・人ならば・五人づつ・馬ならば・一頭づつ・いましてあり」。茂吉は、即座に五七五七七という七句四十一音の新しい定型を作りだしてしまったのだ。そこに茂吉らしい融通無碍な姿勢がある。

が、不思議なのは、そうやってとっさに作られた新しい器が、きちんと短歌として認定に足る韻律や調べを保っている、ということだ。この歌の場合、五七五という初句から第三句までの定型律と第五句から第七句までの五七七というリズムが、色濃く短歌の定型の韻律を保持している。破調の歌であるにもかかわらず、私たちがこの歌に強烈な短歌らしさを感じてしまう秘密はそこにある。

(大辻隆弘『アララギの音楽』による)

(注) 出羽三山 現在の山形県にある月山・湯殿山・羽黒山の総称。

ここちのせらるる、そは一わたりはさることなれども、猶さしもあらず。

始めより終わりまで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事の、ほどへて後に又異なるよき考への出でくるは、常にある事なれば、始めとかはれることあるこぞよけれ。年をへて学問すすみゆけば、説は必ずかはらでかなはず。

1 いづれによるべきぞとあるが、次のうち、このことばの本文中での意味として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア どこに集まるのがよいか
- イ 誰のせいでこうなったのか
- ウ どちらに基づくのがよいか
- エ いっ決められたものなのか

2 猶さしもあらずとは、「やはりそうでもない」という意味である。これは本文中ではどのようなことを表しているか。次のうち、最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 自分の説とは異なっている説を批判して、それを根拠のない説だと人に感じさせるのは、あってはならない行為だということ。
- イ 考えが食い違っていて一貫していない説に対して、全体的に根拠がない説だと考えるのは一概に妥当であるとは言えないということ。
- ウ 人の説を理解するときに、おおよそのことを理解したからといって、すべてをわかった気になるのはたいてい思い違いだということ。
- エ 自分の説が他の人の説と同じだからといって、自分の説のほとんどを交えようとするのは、賢明な選択であるとは言えないということ。

3 始めより終わりまで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかしとあるが、本文中で筆者がこのように述べる理由を次のようにまとめた。 [ a ]、 [ b ] に入る内容を本文中から読み取って、現代のことばで書きなさい。ただし、 [ a ] は十五字以上、二十五字以内、 [ b ] は十字以内で書きなさい。

後になって [ a ] ことは、よくあることであり、また年月がたてば [ b ] ので、人の説は絶対に変わるものであるから。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

建築創造というものは、僕ら建築家にとっては、建築を設計し建設することだが、しかし、住む人間にとっては出来上がった建築物を使うということも創造的なのだ。例えば新居に引っ越して、カーテン一枚窓にかけただけで、その人らしさ、その人のスタイルが出てしまっし、自分の家具や洋服を部屋に並べるだけで、その人らしい空間がつくれる。「使う」ということ、「住む」ということは、創造的なことなのだ。

例えば、ある魅力的な空間を人が見て、それを使ってみたい、住んでみたい、と思うことがある。そのような、人間に使ってみたいと思わせるような、そういう空間の豊かきみないものをつくれられないだろうか。人間が使いたくないような建築、使う使おうか想像力をかき立てたような建築、つくりたい人間に、新しい使い方を想像させる建築を目指すという考え方<sup>①</sup>に則<sup>したが</sup>っていえば、僕らのつくる建築は原則として、特定の機能というものはない、ということもできる。もちろん、美術館だとか住宅だとか、特定の機能に合うように設計はするが、しかし美術館とか住宅だとかいう呼び方は、今現在の建築の使い方であって、未来までも含めた使うことの潜在的可能性という意味では、たとえそれが美術館として現在使われているとしても、その建物がまったく別の使い方を人に想像させ、それが現実化する、ということには十分にありうる。人によっては、僕らの美術館や、そこで活動する人々を見て、これは学校にも使えるかもしれないとか、託児所にいいじゃないかとか、違うことを思うかもしれないし、実際そうなることもあるかもしれない。時代が変われば、僕らとは違う想像力をもった次の時代の人間が、歴史的建造物の魅力に触発されて、当時にはありえなかったような現代的な使い方を、始めるかもしれない。むしろ僕らは、そういった人間の想像力の広がり起きることを望んでおり、そのようなことを引き起こす魅力を建築が持つことを望んでいる。そのようなかたちで、使うことの創造性を呼ぶような、開かれた建築のあり方を、僕らは目指している。

夏目漱石が「草枕」の中で、汽車について、人間の尊厳を度外視した乗り物であると批判したことがある。夏目漱石がどのような気持ちであったのか、今となっては想像するしかないが、ジャガイモと同列に扱われたような複雑な気持ちになったということもあったかもしれない。もちろん、100年前の時代の人間の尊厳というものを、今の時代の僕らが感覚的に理解することは難しい。今僕らは逆に、電車というものを必要としており、電車もそんなに悪いも

2 このような考え方とあるが、本文中で筆者が、「このような考え方」に則<sup>したが</sup>ったとき、建築家のつくる建築に特定の機能というものはないと述べるのはなぜか。その内容についてまとめた次の文の  に入る内容を、本文中のことを使<sup>って</sup>五十字以上、六十文字以内で書きなさい。

建築家のつくる建築は、人や時代の変化も含めた  ことが大いにありうるから。

3 次のうち、本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 今、我々の身の回りにある日用品や生活備品というものは、漱石の時代にはなかったものばかりであるが、それらは漱石の時代やその時代の人間の身体性<sup>②</sup>とつながりをもつものである。
- イ 電車というものを必要とし、電車の旅というものに快適性や居心地の良さを感<sup>じる</sup>ような今の時代の人間にとって、漱石の時代の人間の尊厳<sup>③</sup>というものは感覚的にしか理解することができない。
- ウ 今の時代の自分達の身の回りには様々なものは、人間の感受性や快適性、快楽<sup>④</sup>というものが時を経て変化し、自分達の生活がそれらを求めるようになったことよ<sup>って</sup>つくり出されたものである。
- エ 携帯電話などの我々の周りには諸機械の多くは、漱石には否定され<sup>る</sup>ようなものばかりであるが、それらで溢<sup>れ</sup>ている今の時代の我々の生活にはある種の快適さや自由さや快楽<sup>⑤</sup>のようなものがある。

4 「建築創造」について、本文中で述べられている筆者の考えを次のようにまとめた。  a、  b に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、それぞれ本文中から抜き出さない。ただし、  a は十文字、  b は十四文字で抜き出し、それぞれ初めの五文字を書きなさい。

筆者は、人間の想像力をかき立てるような魅力を持った  a を理想としており、  b ことは、自分達の時代の価値観をつくる契機とな<sup>って</sup>ゆくであろうと考<sup>えて</sup>いる。

でもないと思っている。むしろ電車の旅というものに、漱石が感じなかったタイプの快適性や居心地の良さなどを感じており、人によっては、電車に郷愁すら感じていたりする。そのように、人間の感受性や快適性、快楽<sup>⑥</sup>というものは、時代によって変わっていくものだ。電車以外にも、携帯電話、コンピュータ、ジェット機、人工衛星、様々なものが我々の周りにあり、そのほとんどは、漱石の時代にはなかったもので、その多くは、たぶん漱石には否定され<sup>る</sup>ようなガラクタばかりである。携帯電話やコンピュータやファックスなどの諸機械に「がんじがらめ」の僕らの生活も、相当に不自由極まりない生活に見る恐れもある。しかし同時に、そういった我々の、身の回りに機械が溢<sup>れ</sup>る不自由な生活にも、ある種の快適さや自由さ、快楽<sup>⑦</sup>みないものがある、ということも事実である。またそういう諸物が、僕らの快楽、価値観を<sup>変</sup>形させるような影響を僕らに与えているということもありうる。自分達の身の回りのも、日用品などは、僕らの生活がそれらを望んだ結果<sup>⑧</sup>つくりだされたか、もしくは逆に新しい日用品が登場したから、ぼくらの生活や価値観が変わっていったのか、順序はわからない。少なくともいえることは、それらは僕らの時代、僕らの身体性<sup>⑨</sup>みないものとな<sup>った</sup>モノたちであり、そういった僕らの時代の日用品、生活備品<sup>⑩</sup>というものは、僕らの時代の価値観を鮮やかに表すものでもある、ということだ。

そういう身の回りのモノの中でも最大サイズのものとして、建築があるともいえる。各時代の人間は、各々の生き方、価値観のもと、異なる建築をつくり出してきた。どの時代の建築も、人間はこのように生きるのが豊かなのだという、その時代の人間の生き方みないものを、空間的に表現してきた。そういう意味では、今の時代の僕らにとっての機能性、快適性、もしくは空間経験<sup>⑪</sup>ということを、つきつめて考<sup>えて</sup>ゆくと、それはいずれ、今の時代の価値観<sup>⑫</sup>という問題にな<sup>って</sup>ゆくであろうと思われる。さらに、これからの時代の建築を目指すことは、結果的に僕らの時代の価値観<sup>⑬</sup>みないものをつくるき<sup>っかけ</sup>にな<sup>って</sup>ゆくのではないか。

(西沢立衛『続・建築について話してみよう』による)

1 本文中のA・Dの——を付けた語のうち、一つだけ他と品詞の異なるものがある。その記号を○で囲みなさい。

五 近年、外国との間の人・物・情報の交流の増大や、諸分野における国際化の進展に伴い、日本語の中で「カタカナ語」の使用が増大しています。カタカナ語の使用が増えていくことについてのあなたの考えを、別の原稿用紙に三百字以内で書きなさい。ただし、次の条件にしたがって書くこと。

(注) カタカナ語 Ⅱ 主に欧米から入ってきた外來語や日本で外來語を模してつくられた語で、カタカナで表記される語のこと。

条件 次の【資料】からわかることをふまえて、カタカナ語の使用が増えていくことについてのあなたの考えを書くこと。

【資料】

カタカナ語の例	
カタカナ語	原語（もともになった外国語）の主な意味
コミュニケーション	伝達・意思疎通・通信手段
ポイント	論点・要点・目的・特徴・段階・地点・点数・先端
ニーズ	必要性・必要なもの
テンション	緊張・緊迫状態
リスペクト	尊敬・敬意
コンセンサス	意見の一致・合意

カタカナ語やカタカナ語の使用に関するさまざまな意見

- ・表現のかたさが和らぐ。
- ・人によって理解度が異なる。
- ・カタカナ語を使用しない方がわかりやすい。
- ・格好よくて現代風である。
- ・これまでにない物事や、和語や漢語では表しにくい微妙な意味合いを表している。
- ・多義性があり誤解や意味のずれを生むこともある。
- ・原語の意味とカタカナ語の意味とが異なる。

受験 番号	番
----------	---

得点	
----	--

〈問題五を除く〉

二										
4						3	2		1	
ところ に、						ア	b	a	ア	
						イ			イ	
						ウ			ウ	
						エ			エ	

35

45

22						6	4	4	4	4	採点者記入欄

一							
2	1						
	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
無道人短、無説己之長。							
		ンヤ	エン	タダ	繕	据	芳
				ちに			香
		ン	ノウ		う	えて	

11	2	2	2	2	1	1	1	採点者記入欄

四											
4		3	2						1		
b	a	ア	ありうるから。							人 や 時 代 の 変 化 も 含 め た	A
		イ									B
		ウ									C
		エ									D
				ことが大いに							

50

60

21	4	4	4			6	3	採点者記入欄

三							
3			2	1			
b		a					
ので、		年月がたてば				後になつて	
			ことは、				

10

25

15

16		4				4	4	4	採点者記入欄

